

マドリードの装丁教室

文学部 教授 坂田幸子 さかた さちこ

2001年4月から1年間、義塾の派遣でスペインに留学した。マドリードに到着して、さて何をしようか。いやもちろん研究はするのだが、せっかくだからなにか習い事でもと思っていたある日、タウン情報誌の片隅の「装丁教室 生徒募集」という小さな小さな広告が目に入った。これだ！ さっそく訪ねていくと、教室を主宰していたのはサラという、私と同年代の女性だった。

ここでいう「装丁」とはブックデザインのことでなく製本工芸のことで、西洋では中世からの長い伝統がある。印刷された紙の束をまとめてその背をかがり、背の両端に補強と装飾を兼ねた花ぎれという布を貼り、表紙をつけて背にタイトルを箔押しする。こうして書物は長年の使用に耐えられるよう堅牢に、かつ愛蔵に値するよう美しくできあがる。ひとことで表紙と言っても、総革装もあればマール紙と革の組み合わせもある。背にも比較的簡単な角背と技術を要する丸背がある。また箔押しによって革に模様を施すこともある。これら一連の工程を習得するのに通常は2、3年必要なのだが、留学期間は1年と告げると、講師のサラは決然と言った、「1年で最後まで教えてみせるわ」と。

装丁教室には5、6人の仲間がいた。独裁政権下の困難な時代に勉強を続け心理学博士となったマリッサ、医学部に入学するほどの秀才でありながら薬物依存症で中退したコンスエロ、専業主婦で4人の子どもがいるアナ、などなど。みな境遇も性格も異なるが、書物と手仕事が好きという点では同じだ。手先は忙しくても口はあいているから、いつも賑やかなおしゃべりに花が咲いた。

季節はめぐり帰国の日が近づき、私は修業の総仕上げとなる作品に取り組んでいた。あとは本の背に金箔でタイトルを入れるのみ。帰国の日の前中も私は教室にいた。いざタイトルを箔押ししようとする緊張の瞬間……教室の仲間たちが集まってきた。私が金箔を手にするたびにおかしい冗談を言って笑わせる。おかげでタイトルの金文字は微妙に傾いてしまったけれど、それもすてきな思い出だ。短いながらも修業の末にできあがった本を手に、私は空港へと急いだ。

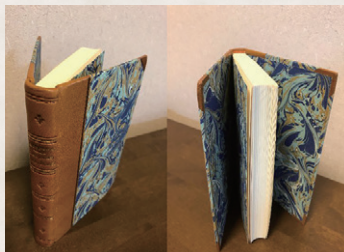
談話室

教員によるエッセイコーナー

室



装丁教室の仲間たち。左から2番目が筆者



帰国当日までかかって仕上げた思い出の本